

主筆 江原萬里

聖書の眞理

第九十五號

九 月 號

不信仰は不自然

主 筆

神の選民

江原萬里

文明ごクリスチャンホーム

エレミヤ記の研究

江原萬里

卷物の燒棄(下)

善きサマリヤ人の主眼點

森本慶三

受難週間の研究

小栗襄三

アブラハムの信仰

石川仲伊

柏木通信

齋藤宗次郎

農村振興と信仰

鈴木敏元

エテオピア國の奴隸廢止

身邊漫筆

エテオピア國の奴隸廢止

先般「諸王の王」ユダの全勝獅子エテオピア國(アビシニア)の皇帝は、七年前國際聯盟に加入條件として發布せられた詔勅の後を承けて、向ふ十五ヶ年を期して其の國に残存する奴隸制度を全廢することを宣言せられた。此の事は、いたく基督教民の興味を惹いた。

由來此の國はアフリカに於ける唯一の基督教を奉ずる獨立國であるのみか、其の歴史は甚だ古く、皇帝はダビテの子ソロモンとシバの女王との間に生れたメネリク以來、皇統連續として三千年に及び、國の誇りは我が國に比べて優るとも劣らない。此の國に最初基督教が傳はつた使徒行傳八章二十七節以下の記事は有名である。パウロに由つて福音が歐洲に入る前、ヒリボ之をアフリカに傳へられたのである。然かもその進展は妨げられて今日に至つた。今後新光明と新文明が此の「暗黒大陸」から輝き出ることを我等は仰望する。

エテオピアは赤道直下に在るも、海拔八千尺の高原であつて涼しい常夏の國である。されど文化の程度甚だ低く、基督教國には相違ないが、チーン・スタンレーはその基督教は基督教たる事をやめずしては是以下に降り得ない程度のものでであると云つた。其の基督教は奴隸制度に反對しないのみか、之を必要として來た。儀式の施行上のみならず、一般に手足の勞働を厭ふ此の國人の生活は此の奴隸によつて支持されて居るのである。奴隸の數は全人口の五分の一に達し、我が國にて女中を雇ふやうに誰でも之を所有して居る。

奴隸制度が如何に社會道徳を墮落せしめるかは云ふを俟たない。人格無視に由るあらゆる暴虐。自暴自棄と無責任、頽廢不倫はそれから生れる。交通制度と行政機關の不備なる此の山國に於て、國民の意嚮に反して之を全廢することは容易なことではない。然かも之を十五年を期して斷行しやうとするのである。我等の深甚なる同情を喚起せしめられたのである。

此の改革の成否は現皇帝ヘール・セラシー陛下の誠意にかゝつて居る。帝は未だ歐洲の地を踏みしことなく、文化低き周圍の野蠻人の中に在り乍ら、其の人道心と父祖傳統の宗教心とは強烈にして、その道徳觀念は歐洲諸國の政治家に比して遜色ないと云はれ、神が之を起して暗黒大陸に光明を入れんとし給ふ攝理であると認められて居る。彼は朝早く起き、夜は遅く寝、閣臣を督勵して居る。帝の謁見室にはリンコンの肖像が掲げられてあるそである。最初此の帝に此の熱心を鼓吹した者はカトリックの宣教師、ハラルルの監督であつたと云ふ。カトリックの名譽である。然るに今や専ら英國の新教徒が此の事業の促進に熱心である。

然り、我等の眼前に暗黒大陸がある。罪惡は之を覆ひ、人は皆罪の奴隸となつてその暴虐に呻いて居る。人心は頽廢し、すさみ切つて居る。此の分で進めば大破壊が来るのは必定である。此の罪の奴隸を解放する者は誰か。嘗てルーテル、カルピンがなしたやうに、何故同じ信仰を有する我等が之を現代に爲し得ぬか。

聖書之眞理

第五十九號

昭和七年九月一日發行

不信仰は不自然

主 筆

基督教の信仰は不自然であり、道理に合はない事を無理に信じ、己が天性を曲げ變物たらしめる者であると云ふ者がある。果して然るか。

私自身、キリストを信じて以來、初めて心に云ふべからざる平安と歡喜とが臨み、眞の調和を感じるやうになつた。今まで分裂して互に争つた内心が完全に調和され、一つの目的に統一され、何の無理なく、自然のまゝに、自由に伸びる事が出来るやうになつた。キリストを信じて、私は天性に復歸したのである。

私は背理なるが故にそれを信する者ではない。最も道理に合へるが故に信する。私は天地が失せても二二が五となる事を信じない。その如く、キリストを信する事が背理であるならば、どうして斯くまで生命の限り之を信じ続けやう。

キリストを信する以前の私の心は明に二つに分裂して居た。其の一つは、自己を愛し、樂しましめ、偉くする念であつた。之は人間本來の念であつて、牢固として深く根ざし、己が意志を以て之を抜くことは出来ない。然るに他方私に良心なるものがあつて、之を非難し、身を忘れ、他を愛し、其のために己を犠牲にせよ、飽まで誠實、飽まで愛、全身全心全靈、悉く神の前に燔祭として献げよと命ずる聲を聞く。

實に人の心は此の二者の闘争場である。良心が目醒め、鋭敏になればなる程、闘争は激しくなる。心の調和は破れ、常に焦ら焦らし、統一は失せて

終始矛盾し、日々懊惱、悔恨、憤怒あり、言ひ難い苦しみの中に生きるのである。

われ中なる人にては神の律法を悦べど、わが肢體のうちには他の法ありて……我を罪の法の下に虜とするを見る。噫、われ惱める人なる

哉。此の死の體より我を救はん者は誰ぞ。

此の状態は人に在りて明に不自然である。他の動物にない此の苦悶ありて、人の自然的發達は阻止され、墮落に沈むのである。

然るに、「我らの主イエス、キリストに頼りて神に感謝す」。私は此の死の體から私を救ひ出し給ふキリストを發見した時、私の失はれたる自然性を回復した。そうです。眞にそうでした。私は本當の私を、キリストの中に發見した者です。新大陸の發見も私の此の發見程大でない。私は實に新らしい完全調和、統一、光輝、永遠の一つの宇宙を發見した者である。

私は彼を私の救主、私の新生命の本源、私の義として信じ、私と一つと感ずる（彼の恩恵に由つて）やうになつて、眞に私自身を愛する者となつた。今までの自己愛は己を滅ぼす者である事が明白となつた。彼を崇め、その榮光を擧げる事程、私自身の救、私自身の榮光はない事を知つた。

然かも、此の念程私自身を忘れ、正義と人道とを愛する道は他にない。即ち、今まで私の心中に永遠の闘争、必死の格闘をなしつつ、あつた自己愛と他愛との二つの念はキリストに由つて完全に和らぎ、一つ目的に一致した、神に服ふこと、己を愛すること、が一つとなり、私の本心からの欲求は神も亦之を私に求め給ふところとなつて、神と私との間に眞に義しき關係が回復した。

さればキリストを信する信仰は人には自然である。不信仰が不自然である。

神の選民 (上)

江原 萬里

一 民族聖別の理由

若し神は全宇宙の創造主であり給ひ、全人類の神であり給ふならば、神の御意はその全般に亘り、全人類に及んで普遍的に妥當する法則となり、特に一族又は一個人により偏頗の差別があらう筈がない。又若し宗教とは、人が神に對する關係を顯はすものであり、他方それは亦神が人に對する自己啓示であるとするならば、凡ての宗教は同じ神から出て一様に真理であり、その間に正邪眞僞の差別があらう筈がない。

然るに此の全宇宙全人類唯一の神の存在を最も明白に且つ堅固に確信する者にして、自己を以てその神の特別の選民となし、神がその民に告げて、

わが僕、イスラエルよ、わが選べるヤコブ、わが友アブラハムの裔よ、われ地のはてより汝をたづさへ來り、地のはしより汝を召し、かく汝にいへり、汝はわが僕、われ汝をえらみて棄てざりき、恐るゝなかれ、我なんぢと共に在り、驚く勿れ、われ汝の神なり。(イザヤ四一・九、十)

と云ひ給ふたと確信する一小民族が居る。まことに「ユダヤ人の鍵鼻」が天に在す唯一の神と地上全人類との間に無遠慮にのさばり出て、己れのみが特別の位置を占める事を誇示してゐるのである。何故神は此の一小民族を選びて、特に己が民と呼び給ふたか。之れ明かに不合理であり、それ故虚妄ではあるまいか。

分業の效用

否、それは決して神の不合理又は偏頗ではない、又ユダヤ人の虚榮心、その誇大妄想でもない。そ

ここに深い理由がある。凡そ何事に限らず、人類に對する各人の貢献は各人之を同じやうになす事は出来ない。各人の天賦の才能は一様ではない。或る者は政治家となるに適し、或る者は學者、或る者は藝術家、而して或る者は宗教家たるに適する。それ故各々その長ずる所に従ひ、適所に於て適する仕事に當る時、各々その天分を現はし社會に對する貢献は最も多い。且つその社會に在つて自己の能力が稼ぎ出す以上の利益を自分も亦享受し得るのである。

その如く各民族、各國も亦その上に生存する種種の國土の力と、その賦與せられた特種の能力を發揮し、互に相貢献する時、全人類は最も善く發達するのである。(近來各國徒らに自供自足を叫び、關稅の障壁を高め、國際的自由交通、相互分業を破壊し、各々自國のみにて生存しやうとするのが現時の經濟界不況の最大原因である)。

各國民各々其の天賦の才能を異にし、其の特種の使命を有する。ギリシヤ民族の存在の意義は、それが全世界に優秀なる哲學と美術とを提供するにあつた。彼等は學者藝術家たるに適した。又羅馬人の存在の意義は、完備せる法典と政治組織とを遺す事に在つた。彼等は政治家たるに適した。その如くイスラエルの民は、神に關する知識を世に傳へるところに特にその民族の存在の意義があつた。彼等は全人類中の宗教家であつた。

イエスは云ひ給ふた。「救はユダヤ人より出づべければなり」。(ヨハネ傳四・二三)と。之が此の民の天職であつたのである。各人、各民、各その天職を異にする事を思へば、神が己を全人類に知らすために、特にイエラエルの民を選び給ふたといふ事は、何等の不公平でも不合理でもない。その數甚だ微少にして、小國土に住し、他に何の優れたるところのない此の民の存在は、實に之を宗教

的に見て始めて有意義である。その歴史は暗夜に輝く燈火の如く、神の御手の業を示し、その國語は實に神の御言として眞理を全人類に傳へた。

宗教的天才の原因

何人もイスラエルの民が宗教的天才であつた事は之を否認しない。然れども、神が特に此の民を選び、特に之に己を啓示し、此の民を用ひて全人類に己を知らしめ給ふたといふ事、即ち、此の民族は特別の意味で神の民であつたと云ふ事實を否認する者は少なくない。

たしかにイスラエルの民族は宗教的天才であつた。彼等はその始めアラビヤの曠野に住んだ。そこは地上の物質に甚だ乏しかつた。その爲め彼等の思は常に天空に馳せた。空氣清透にして夜は星斗獨り輝く曠野に在りて、彼等は將來に希望をかけ、以て目前の窮乏を忍んだのである。彼等は又特有の民族性を有した。實に彼等は夢みる民で

あつた。彼等は度々その希望が現實の窮乏に由つて裏切られ乍らも、少しも未來の光榮の夢を捨てない民族であつた。(スミス著イザヤ書講解第二卷二百九頁以下參照)。

かくその生立ち、その周圍の境遇、又彼等が持つて生れた性情からも、彼等には特に熱心に神を慕ひ求める心があつた。

然し乍ら、凡そ天才でも宗教的天才たることは、神を知る能力の優れたことを云ふのであつて、此の天的能力だけは、地上の事業に關する他の能力と異なり、地的なる狀況によつては生れず、發達しない。天に在す神自ら降つて其の心を啓き給はねば、我等は神を想像し得るとも、その眞相を知る事は出来ない。彼等が宗教的天才であると云ふ事自身、即ち彼等が特に神を知るに至つたと云ふ事自身、神が特に此の民に現はれ、特に神を知る能力を彼等に賦與し給ふた善き證明ではあるまいか。

人は自己を他人に示すに、妻子に對すると友人に對すると、又召使の者に對するとによつて、その態度を異にし、此等に對して顯はす自己の方面は夫々異なるのである。如何に平等に人を愛せばとて、子に對する愛を以て妻を愛しない。君は君とし、親は親とし、子は子とし、妻は妻とし、友は友とし、僕は僕として愛する。若し我等は一樣に人を愛しなければならぬとて、妻子、親兄弟、友、師、君、僕、悉くを同一視し、同一の態度に出でたならば、人の社會は大混亂となる。神は全人類を愛し給ふ。然し乍ら神の愛は杓子定規でない。各個人個人の性情に應じ、又その使命によつて、之を愛し、導き、命じ給ふのである。神のイスマエルの民に對して、特に己の全體を示し、特別の任務を委ね給ふたとて、それは特にその者を依怙最負し給ふたのではない。之に由つて全人類に神を知らしめんがためであつた。

神の自由なる選別

出來イスマエルの民が同族なるセミチツク人種の中に在つて、只彼等のみ獨り唯一の神を信するに至つた経路はまことに著しい事であつて、此の事實は只彼等が宗教的天才であつたといふだけでは到底説明出來ない。否、啻にそれのみでない。彼等は天地を創造し、全人類の神なりと信じた彼等の神エホバに對して忠良なる民でなかつた。彼等の歴史は背教史である。彼等は「頂の固き民」であつて、容易にエホバを信ぜず、又「悖れる民」であつて、容易く彼等の神を離れ、周圍の民族の神空しき、偶像に移り往いた。彼等はその同族たるアンモン、エドム、モアブ其の他の民と異なるところなく、殺伐であり、半野蠻であつた。此の民族が獨り肉慾的幸福の神を拜せず、嚴正なる道徳の神を拜し、その神の御意は全人類を導き、全宇宙を統治し給ふ事を認め、此の神を眞の神とし、

且つ己が民族はこの神を全人類に顯はすための特選の民であると自覺するに至つた事は、如何にしても神自身が此の民をその生れ出づる前より預め選び給ふからであると云ふ外はない。

眼は皮膚の一部が變質して出来上つたものである。其の本質に於て他の皮膚と何の異なるところはない。然るに此の皮膚のある一部が光線に敏感とせられ、之を感受し得て、外の世界が之に映寫するやうになり、他の部分の皮膚が見る事を得ない世界を見るやうになつたのである。されどいづれの皮膚も悉く眼とはならない。未だ胎内を出でず、その形が出来上らない以前に、皮膚の或部分は既に眼となるやうに預定されたのである。

眼が眼として特に皮膚の中から選ばれ、外界を見得るやうにせられた事は、眼自身の爲めではない。全身體のためである。神が特に全人類中からイスラエルの民を豫め知り、之を選び、特に己れ

を明かに見せしめ給ふたとて、それは神に於て何の偏頗でなく不合理でもない。我等は此の民族の歴史に於て他の民族の歴史に於て見る事を得ない神の御事績を發見することを得るのである。

其の歴史の特殊性

私は第一に神は天然に、又我等の歴史に、又各々の良心に顯はれ給ふ故に、我等は之を通じて神を窺ひ知り得べしと云ひ、然かも我等の智慧は暗く、その良心は不純であつて、之に由つて知り得たる神の御姿はおぼろである。それ故神は我等をして明かに己を知らしめ給はんがために、特にイスラエルの民を選び給ふた事を述べた。實に神は特に此の民の歴史を指導し、その中に神の御意を明白に顯はし給ふたのである。而してその民の敏感なる良心である預言者を召し、之にその御意を啓示し、その意味を解釋、説明せしめ給ふた

のである。イスラエルの歴史は實に預言者の先見通りに生起し、その解釋によつて、初めてその繁榮と衰亡、隆盛と悲惨とが悉く意義あるものとなつたのである。

イスラエルの預言者は、己が民の歴史は悉く神の御手に在ることを明かに認めた。彼等の神はその民に對して此の後爲さんことを、預じめ語り得る神であつた。さればその御言程民の運命について重大事はない。一切はその通りになるからである。

夫主エホバはその隠れたる事を僕なる預言者に傳へずしては何事をも爲し給はざるなり。獅子吼ゆ、誰か懼れざらんや。主エホバ言語ひ給ふ。誰か預言せざらんや。(アモス三・)

七一八)

預言者の此の史觀は決して誤らなかつた。彼等の預言は決して自分の主觀を述べたものではなかつた。彼等は十八世紀の合理主義者が云つたやうな變態心理の所有者でなく、其の識見に確乎たる客觀的根據あり、その預言は事實として歴史に實現し、客觀的にその正確が證明されたのである。

イスラエルの歴史とその預言とを精査すればする程、何人も驚嘆しないものはない。之を精しく驗べて、神が此の歴史と預言者との背後に在つて自らを預言者に示し、又神自らその民の歴史を導き給ふた攝理を否認出来ない。

民族創始と出埃及

バツクルが英國史を著はして、所謂自然史觀を提唱した時、丁度現今マルクスの唯物史觀が人々に多大の感銘を與へたやうに、當時の人々に多大の感化を與へた。彼は云つた。凡ての民族は其の國土の產出物であつて、その歴史の趨勢は環境、氣候、風土に由つて説明せらる。故に若し或る民族をその國土から引き抜いて之を他の國土に移植せ

ば、彼等は今まで持つて居た特性を喪失して全く別種の民族となる。之が彼の所論である。之に多大の眞理のあることは否認出来ない。英國人中最も熱烈な信仰と愛國心とを有した一群が米國に移住して數十年、彼等は眞眞の米國人となり、最早英國人ではなかつた。

然るにイスラエルの歴史は全く此の例外を爲すのである。抑も、此の民族の創めが國土の産出ではない。その始祖アブラハムは特別の使命を自覺し、神の命なりと信じて、現今にて云へばロンドン、紐育、パリにも比すべき當時最も物質的文明の發達したカルデヤのウルを立ち出で、其の子孫と共に、遠くシベリアの曠野又はアフリカの森林にも比すべき人跡稀なる未開のバレスチナの地に到り、そこに天幕を張つて遊牧に一生を過した。之が此の民族の創始であつた。それは神の命而して之を信じた信仰が此の民族を創造したので

ある。建國史としての美はしきは、ビルグリムス父祖が英國を立ち出で、北米マサチューセツトのリモスに移住した事からして北米合衆國が出来た、それ以上である。

イスラエルの民は其後饑饉に遭ひ、難をエジプトに避け、永年そこで奴隷の苦役を重ねた。全く無力、無援。若しこれが普通の民族であつたならば、此の時自滅して仕舞つて今はこの地上に獨自の存在を喪失したであらう。然るに神は奇しき御業を顯はし、之をエジプトの地より援け出だし、荒野に於ける四十年の遊牧生活を経て、再び之を約束の地に歸へらしめ給ふた。その事蹟を聖書で讀む者は、誰かそこに神の特別の御導きのあつた事を疑ふことが出来やう。イスラエルの民は常に此の事を思ひ出て、動々もすれば此の世の繁榮を祀る偶像を拜せんとする心を引きしめたのであつた。實に我等にはエホバの特別の指導あり、我等

はエホバに由つて選ばれ、エホバの特別の御用を勤める者であると云ふ彼等の此の信仰が此の民をしてその民族的生命を維持せしめたのであつた。

繁榮と悲境

彼等にとつては景氣のよい時が一番慎ろしい時であつた。何となればその繁榮に由つて、他の民族と同様に物質的幸福と此の世的榮華とを慕はしめ、神の選民としての特別の使命の自覺を喪ふ危険があつたからである。アハブ王の時、王が當時地中海の女王と云はれた繁盛の海港チレの市の王女を后とし、其の市のバアルを迎へ、バアルの預言者四百人を王宮に招聘して専ら産業の開發に勤めた時がそれであつた。此の時エリヤが出て大に之に反對し、遂に革命を起してオムリ王朝を顛覆し、「エホバのみイスラエルの神」たる國是を確立せしめた。此の時は此の民の歴史中眞に危機であつた。若し預言者エリヤ出でず、國民の膝が悉

くバアルに跪いたならば、恐らく國は産業盛となり、一時榮えたであらう。然かも今は周圍のバアルの民同様に滅びて居たであらう。

然るに宛も身は重患に臥し、醫師より不治を宣せられ、待つべきものは只死のみにして、地上の光明も見えない時、又事業に大失敗をなし、家財蕩盡し、世の罵言嘲笑の中に恨を吞んで死し、一家は四散し、子等は僅かに人の憐によつて生き、四方何處を見ても一家再興の機運は全然ない時の如く、彼等の國は滅び、國土は荒れ果て、民は他國に捕へ移され、異邦人が代つてそこに住むやうになり、彼等の前途は暗澹にして四顧、何處からも救援の目當なく、何人にも國家再興などは思もよらず、只座して自滅を待つあるのみと見られた。彼等の歴史中最も悲境なりし、此の時程、此の民族は明白に己が神を知つた時はなく、神の特別の使命を自覺した時はなかつた。之に由つて

彼等は心中に大なる希望を發見した。之が火の柱、雲の柱となつて彼等を導き、よく苦難に耐えしめ、逆境に克たしめ、遂に再び國土に還つて國家を再建せしめたのである。當時彼等を征服した大帝國とその民とは悉く滅びし今日まで、彼等のみを存續せしめたのである。

此等の歴史を精しく研究して、其の中に神の特別の指導のあつた事を疑ふ事が出来やうか。患難にあつて初めて神を知り、神に由つて打ち勝つた經驗ある者には、彼等の歴史は己自身の信仰史である。されば、彼等の歴史は之を自然史觀を以てしては説明つかない。今世に唱へられる社會史觀を以てしても亦不可解である。若し説明出来るならば説明して見よ、我等聽かん。(以下次號)

文明とクリスチャンホーム

現代人は皆文明の惠澤に浴して其の價値を知る。其の法律制度、政治組織、教育と産業、科學文學、哲學藝術、汽車汽船飛行機ラヂオ、軍艦大砲毒瓦斯を誇る。之で自然を制御し、野蠻を平げ、地上に樂園を築き、安樂豊富の生活を爲さんとする。此の文明は基督教の結果生じたものである。然るに現代人は其の源を忘れ、父祖の信仰から離脱し、只結果の甘美に陶醉して居るのである。

我等の見たところの多くの所謂クリスチャンホーム亦それと同様である。善良にして優雅、教育あり品性美しく、一家團圓の楽しい家庭である。それは彼等の親が基督的堅信に由つて築いた結果であり、彼等は勞せずして繼承した遺産である。然も信仰は只形骸のみ存し、剛健必死の氣なく、只基督教の餘澤ばかりを享樂して居るのである。此の文明と此のホームの往先は同じ。

エレミヤ記の研究 (三)

卷物の焼棄(下)

江原 萬里

再卷の編纂

マルチン・ルーテルは、人は何人も唯だ信仰のみに由つて神に義人として認めらるゝとの大真理を唱へて全歐洲に大革命を起した。一躍彼は新時代の中心的人物となり、大變動の泉源となつた。然るに彼がウォルムスの會議に召喚せられ、皇帝からその信仰の撤回の勸告を受け、斷然之を峻拒した後、ワルツブルク城内に、暫く身を隠匿して靜かに聖書の獨逸語譯をなした時、彼の唱道した真理を後世へ傳へ、その宗教改革の基礎を牢固として抜き難きものとしたのである。

丁度その如く、エレミヤは王の追捕を避けてバ

ルクと共に暫く姿を隠し、「無理強ひの怠惰」の中に入られた時、神は彼に同じやうな仕事を與へ給ふた。現在のエレミヤ記の根幹をなす卷物の再編纂がそれであつた。神は神の者を用ひ給ふに、必ずしも外界での活動を以てし給はない。「立ちて待つ者も亦走る者と同じく神に仕ふる者である」。或は職を失ひ、身は病に臥し、外に對して何事もなし得ざる者として、神は之を用ひて活動以上の意義ある仕事を授け給ふ。只靜かに信じて依り頼む事に優りて有意義なる事業達成の途はない。

王、卷物およびバルクがエレミヤの口にしたがひて記せし言を焚きし後、エホバの言エレミヤに臨みていふ、汝また他の卷物をとりにて、ユダの王エホヤキムが焚きしところの前の卷物の中の言を悉く其れに記せ。……是に於てバルクはユダの王エホヤキムが火に焚きたるところの事の凡ての言を、エレミヤの口にしたがひて之に記し、外にまた、斯る言を

多く之に加へたり。(三六・二七以下)

然らば最初の巻物と再巻とはどれだけの相違があるかと云ふに、初巻は一日中に三回も之を通讀し得た程なれば大冊ではあるまい。それ故今までエレミヤが爲した預言の全部を網羅し得なかつたであらう。それはその時の必要に應じ、國民を警告するに足る部分だけに限られたであらう。然るに初巻は焚かれ、當座の目的は過ぎ去つた。エレミヤは此の度は過去二十三年來爲し來た預言全部を、永久に保存するために隠匿中の閑暇を利用して、編纂したものと思はれる。

カルケミシの戦はバビロンの世界的覇權を確立せしめ、豫てからエレミヤが預言した北よりの禍の實體を明瞭ならしめ、エレミヤの過去二十餘年間の預言は間違ひでなかつた事を證明した。而して今や彼の生命は王の迫害に遭ふて、正に風前の燈火の如く、何時消ゆるかわからなくなつた。然

かも今は隠匿中にして外に向つて活動する機會は全くない。爰に於て乎、エレミヤは全餘暇を悉く之に集中して、初巻以外の預言をも全部集め、之をバルクに口述して再巻を作らしめたものである。即ち「斯かる言を多く之に加へたり」である。

此の再巻が現在のエレミヤ記の中核をなすものである。エレミヤ記第二章以下第二十五章まで、其中エホヤキム王の四年以前のエレミヤの預言がそれである。此等は大體年代順をなし、又エレミヤ自身を「われ」と呼んで居るのはそのためである。此の再巻以後の預言は、エレミヤ自身を呼ぶに、多くは「かれ」の語を以てしてある。且つ其の編纂の順序は必ずしも年代順でない。之れバルクが自ら編纂した數部の預言集を、後世に至つて漸次之に附加したゝめである。

カルケミシ以後の國運、

エホヤキム王がエレミヤの巻物を燒棄し、神の御言を輕蔑し、更らに神から遣はされた預言者を捕へて之を殺さうとすると聞き、エレミヤは義憤に燃えて王を痛罵した。

一八此の者に禍あれかし、

エホヤキ王に。(彼死ぬるとも)

噫我が兄よ、姉よと呼びて、

彼のために誰も嘆かず。

噫我が君よ、陛下よと云ひて、

彼のために誰も泣かず。

一匹の驢馬を埋めるやうに埋められ、

エルサレムの門外に引づられて、

そこに投げ棄てられん。(第二章)

ユダの國運は次第に傾いた。夕日西に落ちて、

暮色杳然として遠きより襲ひ來た。やがて眞黒ら

闇となるであらう。黄昏れつゝある昨今、ユダよ、

汝の國歩が山に躓かぬやう、今となつても尙遅か

らじ、悔改めて神に歸へれ、亡國は間近し、民は

囚はれて異境にづながれ、神の賜ひし此の愛する國土は荒地とならん。汝らはそれを感ぜないか。

一五耳を傾けて聽け、驕ぶる勿れ、

エホバ語り給ふ。

一六眞黒ら闇とならぬうち、

汝の足がたそがる、

暗き山路に躓かぬうち、

汝の神エホバに榮を歸せ。

汝ら光をまでと神黄昏く、

眞つ黒闇になし給ふ。

一七若し汝ら聽くことを好まずば、

心ひそかに我が靈魂は泣く。

汝らの傲慢のゆゑ、

我が眼に涙流る、。

エホバの羊は囚はれゆけば。(第三章)

私はエホヤキム王の其後と其の治下のユダの歴

史について大急ぎに語らう。

六百二年即ちカルケミシの大勝の三年の後、ネ

ブカドレザル王は父王ナボボラサルの後を嗣いでバビロン王となり、大軍を率ゐて、エジプトの國境まで南下した。エホヤキム王は大勢に抗するこゝと能はず、遂にバビロンに屈し、之に貢を献納するやうになつた。

三年の後彼はエジプトの後援の約束に空頼みし、又多分周圍の諸民族と防禦同盟を結び、バビロンに背いた。爰に於てネブカドレザルはユダをして再び背くことなからしめるため、自らユダを征せんとし、先づバビロンの軍兵と、スリア、モアブ、アンモン等の軍兵より成る混成軍團を遣つて之を攻めしめ、ユダの聯合軍を破つた。

二。レバノン山に登りて叫べかし、

バシヤムに汝の聲を擧げよ。

アバリムの山より號び呼ばはれ、

汝らの愛人は皆敗れぬ。

三。汝の平安ヤサキの日にわれ語りしに、

汝云へり、吾聽かじと。

之若き日より今になるまで汝ならはしの常習にして、

汝は我が聲を聽かんとせざりき。

三。汝の友は皆風に吹きやられ、

汝の愛人は虜はれてゆきぬ。

汝恥ぢてあはてふためく、

汝の探れる途の皆惡しきゆゑ。(第二章)

レバノン、バシヤム、アバリムはユダの東方及び北方の山地の名である。此の處を守つた守備軍は悉くバビロンの軍勢のために破れ、ユダの愛人、即ち同盟軍は皆捕虜となつた。ヨシア王の大改革の結果に過信し、神の守護を空しく頼んで預言者の警告を聞かず、眞に神に歸へらなかつたユダは、遂に此の大敗を見るに至つたのである。

此の年エホヤキム王は死し、其の子エコニア後を嗣いでエホヤキンと稱した。父王はエレミヤが預言したやうな、驢馬の屍と同様に棄てられずして、立派に先祖の墓に葬られた。(列王後二四・六)

然し乍ら國民の膏血を絞つて己が宮殿を大國の王宮に模して華麗ならしめ、冷酷、暴虐であつた此の王は、或は死後群衆のためか、又はバロン軍のために、其の墓を發かれて汚辱されたかも知れない。若し何らかの形式に於てエレミヤの預言が成就してゐないならば、スキンナーの云ふやうに此の王に關する預言がエレミヤ記中に載せられて後世まで傳はる事は難しいであらう。

エホヤキン王と第一回流配

エホヤキン王は父王と異なり、國民の人望があつた。エゼキエルは彼を「若き獅子」(一九・五及六)と稱した。されど彼が即位して未だ三ヶ月を経ない内に、ネブカドレザルは大軍を率ひて攻め來り、五百九十七年、エルサレムは一たまりもなく屈服した。王と太后と王妃と政府の大官と國中の優秀なる工人と戦闘に適する者とは悉くバビロン

につれゆかれ、後には只賤民が残された。

一八 王と太后とに告げよ、

地に俯れ伏せよと。

汝らの頭より落ちぬ、

その誇なる冠は。

一九 南部の町々は閉ざされ、

これを開くものはなし、

ユダは皆流囚となりて、

一掃され終りぬ。(第一三章)

後に遣つた民は、王は神の御救に由り速かに歸國して再び君臨するものと思ひ、之を待ち望んだ。エレミヤは之について歌つた。

二〇 彼は破れて賤しめらる、者ならんや、

此の人コニアは。

人々に好まれざる器ならんや。

何とて彼は追拂はれ、

未知の國に投げ棄てられし。

二九 あ、地よ、地よ、地よ、エホバの御言をきけ、

三〇 子なき者として記き録せ、

又一生榮えざる人として。

彼の裔は誰も榮えず、

ダビデの位に再び座して、

ユダを治むることなからん。(第二二章)

此の詩は國民の空しき期待を破らんがためであつて、王を憎んで歌つたものではない。王の子は遂にユダの王位を嗣ぐことなかつた。彼はバビロンにつれゆかれて長く牢獄に縛られた後、釋されてバビロンの王宮に住み、王族の一人として待遇され、晩年をそこに終へた。

ユダの國の選良はエコニア王と共に今や悉くバビロンにつれゆかれた。國に遺つた者は無智頑迷なる下層級の民のみであつた。彼らが國政の衝に當ることゝなつて、エレミヤの任務は困難となり、益々彼は悲哀の人となつた。

善きサマリヤ人の

話の主眼點

森本慶三

ルカ傳十章二十五節以下にある所謂善きサマリヤ人の話と、それに續いて記されてあるマルタ、マリヤの話は、餘りによく知れ渡り居ることではあります。何の爲にこゝに語られて居るか、その主意は那邊にあるかに就きては往々に見過され易い恐がありますから、よく之を翫味することが大切であると思ひます。此頃自分が此處を學びて感じたる點を述べて皆様の御批教を仰ぎたいと思ひます。

私は思ひます。このサマリヤ人の奇特なる德行及マリヤの優やさしき態度そのものは固よりそれ自身に多大の價値がありますが、イエスがこゝに之を相手の教法師及マルタに向て語り玉ひしその眞意

は、單に彼等の善行美事を賞讃して、汝も之に習へとして其手本を示すにありと見るのは、今一つ肝要な眼目を逸することになると思ひます。これはこの二人の佳話を材料として、自らを義とする教法師と、妹を咎めんとするマルタとに深い反省を與へ玉ひしところに其眞意があると思ひます。サマリヤ人とマリヤの事は偶其頃又は其場に起りたるうるはしき事件であつて、之が適當な良好の教材に用ひられたに過ぎませぬ。目的は他にありません。即ち教法師とマリヤの高ぶれる心を碎きて、信仰の大初なる眞理を教へんとし玉ふに外ならぬと思ひます。

先づ教法師の場合より考へて見まじやう。即ち彼の教法師は始にイエスに向て、永生を嗣ぐ爲には何を爲すべきかと尋ねて居ます。

この「爲す」といふところが即行爲によりて永生

を贏ち得んとすることが已に間違の第一歩です。福音の眞髓は救は行によらず信仰によるといふにあります。教法師には律法の外に救にあづかる途のあることが分りません。これはユダヤ人通有の過です。否、人間一般の陥れる誤謬です。人間の行爲に永生を嗣ぎ得るほどの大なる價值が存する様に思ふ迷妄です。眞面目な人が皆この途より上り來てしかも喘ぎ／＼終に途中に倒れて、山巔を究むるものゝなきその途です。此外別に救あるなし、そは天下の人の中、我等のより頼みて救はるべき別の名を賜はらざればなりとあるその大なる御名に信頼することに氣付きませぬ。そのこゝに思ひ當るまでには中々苦い多くの失敗と苦痛とを重ねます。パウロが然でした。パンヤンが然でした。我法然が然でした。信仰一途、十字架一天張、他力本願といふ光明の見へるには所謂道德家や學者と言れる人ほど困難を感じる様です。

教法師は律法の師として人も許し、自分も許して居ります。彼がイエスに永生の途を尋ねたのは眞に切なる要求があつてではありません。この點につきてイエスが如何なる意見を以て居られるか、自分と同意見であるかどうかといふことを試み、あはよくば自分の考に共鳴して貰ひ、自分の思想に裏書して貰つて、自分が已に永生に入れるものであるといふ自信と自負心を満足せしめたいとの意志であつたやうであります。故にイエスが彼に向て「それはお前の言ふ通りに行へばそれでよろしい」と申されました時に、彼は「何か尙自分のやつて居ることに不足でもあるかのやうにイエスが更にかく／＼せよ」と言はれたものと考へて自分の今して居ることではまだ足りませぬか、先生は隣を愛せよと言はれますが、私はその位の事はして居る積りです、先生が仰せられます隣とはそも／＼如何な意味ですか、と大に不平不満の語

氣を以て更に反問し來つたのでした。

この彼が自分を義と信じ、自分には何も欠點はない、隣を愛する位の事は已に實行して居るとの自負心は餘程強かつたものと思はれます。この心こそ實に信仰には甚妨げとなるものであります。かゝる自尊心が碎かれて自分は實に弱きもの悪しきものであるとの事が自覺できて來ねば、とてもイエスの前に俯伏して、主よ我を憐み、我を救し、我を救ひ玉へとの謙卑な祈願は起つて來ませぬ。この信仰ができねば永生は得られませぬ。

教法師には此信仰に至る謙遜な心が出來て居ません。そこでイエスは彼の間を利用して「隣とは何ぞや」との具體的實例をサマリヤ人の話を以て説明して、汝の同輩たる祭司、レビ人の爲し得ざりし所にして、汝等が賤視せるサマリヤ人の爲したる程の善行を爲して見よと迫られました。これは丁度富める青年に「何の欠けたるところ我に

ある」との自負心を碎かん爲に、汝尙一を欠く、行て汝の所有を賣りて貧者に施せとの青年自身にとりては實になし得ざりし難問を提出して、彼に頂門の一針を加へ玉ひしと同様であります。

教法師はイエスの言によりて果して如何にせしやは、こゝに明記されてありませぬが、要は彼がその教に従ひて敵をも愛する愛を實行せしや否やにあるのではなくして、この一言によりて彼が自己の眞價を悟り、主よ我は罪人なり、我を憐み玉へと直に其の御前にひれ伏すにありませぬ。然らずして彼の心が矢張りそのまゝであつたならば、よしその教の通りに行つたとしても、イエスはより高き難問を示して彼の心を更に打ち玉ふであらうと思はれます。故に善きマリア人の話は善行の模範を示されたのではなくして、これ丈の善行すら出来ぬ己が心の醜さを照さん爲の明鏡であり、其自負心を碎く爲の鐵槌であつたのです。

次にマリアの場合を考へて見まじやう。マリアは實に善き方を選びたりとのイエスの御言は様々に解釋さるゝのでありますが、この場合に於ける主眼の點より見て、これは何もマルタよりもマリアの方が勝つて居るといふ比較の言でもなければ、又マリアはマルタよりも福な役目に當つて居るのであるとしてマリアをマルタの非難より庇ひ玉ふたのでもなく、只單にマリアも矢張りマルタも同様に善き事をなして居るのであるから、別段之を止めさす必要はない。マルタはマルタでなさんとするとところをして居ればそれでよい、何も他のなすところに容喙するに及ばぬとの意味にて、マルタの自尊心に軽い訓戒を與へ玉ふた事と見たいのであります。

或註譯者がいひました様に、この時もしマルタが、かゝる不満を訴へさへしなかつたならば、イエスもまた何等かゝる訓戒の言を發し玉はなかつた

であらうと、私も至極同感であります。マルタの物質的待遇を批難し、マリヤの精神的歡迎を賞揚し玉ふたといふのではありますまい。物質的でも心靈的でも、共にイエスを愛遇する途に變はありませぬ。人各その性格により、材能により、その境遇に應じ、その立場に従つて、その使命を異にし、各自その盡す途を別にするのは止むを得ません。この場合マルタは一家の主婦として、これだけの事をなすは善き事であり當然の事であると思ひます。

問題は自分の働が獨り肝要で他人の働はつまらぬ様に見へるといふ心そのものにあります。自分は自分の立場さへ守りて、それに全力を盡して居ればそれでよろしい。何も他を己に比べて自分はより善き働をして居るのであるから、他のものは來て我を助けて然るべきであるといふ自尊自恃の心それが悪いのであります。假に地位をかへてマ

リヤがもし我は姉よりも優りたる善事をなして居るのであつて、何も姉を助ける必要はない杯と考へて居つたとすれば、マリヤのその自尊心は矢張りイエスによりて正されなければならぬものとなる筈です。

故に此話はマリヤの行が善いとか勝ぐれて居るとかいふのではなくて、眼目はむしろマルタの自尊心そのものにあります。「必要なるものは一つなり」との語も、矢張りマルタの多くの事にて焦慮散亂するほど自分獨りよがりの事業心功名心を鎮靜是正せんととの深慮より出でたるイエスの御教であります。多くの事業、様々の善行を以て神に奉仕せんとあせるより來る自負慢心は謙虛從順なるべき信仰には甚妨害となるものであることを示し玉ふ爲であります。サマリヤ人の場合と均しくマリヤの善業も單にマルタの心を戒める材料に用ひられたに外ならぬと見るのが適當ではないかと

思ひます。

マルタ、マリヤの話は多くの註解者の説によれば前のサマリヤ人の話とは遙に後の事であつたらふとの事です。歴史的順序を重んずるルカ傳記者の筆法としてはその順序を無視したる觀がありませんが、これは矢張り同一様の訓戒を一括せんとする心持より順序に拘泥せず、こゝに擧げられたもの、様です。その點より見てもこの二つの記事の主眼點が何れにあるやがほゞ窺はれる様に思はれます。何れも共に救は謙卑従順なる心より出づる信仰によるものであつて、決して自負自尊に導く恐ある行爲によるものでないとのパウロ的福音の大眞理を暗示したるものであると思ふものであります。

受難週間の研究 (六)

彼らを選けて隠れ給へり

小 栗 襄 三

エルサレムに入城以來、イエスは日々晝は宮にて教へ、夜は出で、オリブ山麓のベタヘヤに宿り給ひ、既に日曜日より三日目に及んだ。其間に彼はこゝ數日に迫つた十字架の死を前にして、爲す可き事は悉く爲し、語る可き事は悉く語り給ふた。早朝より彼の御教へを聽かんとて、宮に群る衆人には教へ、又イエスさへも畏に掛けんとする學者教法者の質疑は峻烈に説破し給ひ、神殿を食ひ物とする奴輩の奸行を鞭にて窘め、弟子等には折ある度に明瞭に彼の死と復活と再臨を告示し給ひ、その他多くの徴を人々の前に行ひ給ふた。

然し遂にイエスは

なほ暫く光は汝らの中にあり、光のある間に歩みて暗黒に追及かれぬやうに爲よ、暗き道を歩む者は往方を知らず。光の子とならんにめに光のある間に光を信ぜよ

との御言葉を残し、彼らを避けて隠れ給ふたのであつた。

今やイエスは十字架を前にして、一日の休養を取り給ふたらしくある。受肉せられて三十有餘年の休みなき生活、特に公生涯に入られてより此方三ヶ年、枕する處なき地上に於ける貧困の生活に終末を告げ、十字架上に全人類の救済の道を開く可く、神よりの使命を完成せんと爲すにあたり、人々を避けて隠れ給ふた。

これは神と靜かに相交る爲めであり、又肉體の休養の爲めでもあつたであらう。誠に民衆に教ふ可き、又爲す可き義務を完全に成遂げし、いま、イエスは當然肉體的にも精神的にも休養を要求せら

れたであらう。乍併ら、彼の特に休養を欲せられた理由は、彼の最後の重大なる使命——即ち贖罪の道——を完全に成就せん爲めの休養に外ならなかつた。彼は暫時人々を避け、又弟子等をも避けて、唯一人御姿を隠し給ふたのであつた。

唯一人、誰人にも煩はされず、天地間只神と彼のみ、これのみがイエスの眞の休養であり、生命の源泉であり給ふた。今日迄幾度か枯れ果てんとせし生命は、天より再び供給さるゝ御靈に甦つたのである。乍併ら、この休養は今や現世に於ける最後の場合となつた。彼は彼の全生命を人類救済の爲めに、十字架上に投掛くる時は來つた。この場合彼は何よりも先づ人里離れし靜寂なる地を渴望された事であらう。

靜かな生活、靜かな祈禱。曾つてはガリラヤ湖畔に、ヘルモン山麓に、ナザレの丘上に、タボル山中に神と偕に在りし生活は、彼れを如何に樂し

ましめ、又慰めしめた事であらう乎。この數日間繁華なるエルサレムの生活は如何に彼をして、かの静かな生活、祈禱を慕はしめた事であらう。

この貴き静かなるイエスの一日、神と偕なる聖き一日、然も彼の地上に於ける最後の休養日に、御弟子の一人イスカリオテのユダは、エルサレムにて主を賣らんと東奔西走しつゝあつた。祭司長、宮守頭等も如何かしてイエスを捕へんと時期の到來を待つてゐた折も折、ユダの奔走は功を奏し、イエス賣買の契約は成立しつゝあつた。

彼は幾何に取り引きされたであらう乎。その價は奴隸一人の價格に等しき銀三十であつた。(參照出埃二・三三)ユダの眼に映じたイエスの價値は奴隸一人の値段であつた。彼はイエスの値段を銀三十(邦貨約四十圓)としか量れなかつた。ユダには神の子は奴隸一人と等しく、又彼の利用價値は銀三十枚であつた。誠にイエスを金錢に換へる時に

は奴隸一人の價値しかない。乍併ら、我等の衷心にイエスを迎へる時に彼は無限の價値を藏してゐるのである。イエスを商品化する時に金錢的價値は無くなる。乍併ら、彼を受入れて神に我等の罪の代償として彼を支拂ふ時に、無限の價値は生じ、新しき生命、神の國を購ふ事が出来るのである。利用方法の顛倒はその價値を無にする。

時は刻一刻、分一分、秒一秒と十字架への道を刻む、オリブ山中にて静寂なる休養を樂しみ、神と相交るイエスに相反し、他方ユダは、塵芥の都市にイエスを賣らんと奔走に餘念がない。事實は餘りにも悲惨である。

イエスのこの暫時の休養は誠に薄氷上の憩ひに外ならない。彼の足臺なる氷雪は今や龜裂を生じ、又溶解しつゝある。

然し彼のこの一瞬の休憩は、彼を如何に慰め、如何に勵まし、彼れの使命完成に對する生命力を

充實した事であらう乎。誠に彼は迫害に、誹謗に、僞證に苦しめられ、敵が木蔭に亂舞する時、今や四面楚歌の唯中に座さんとする秋に、神と偕に靜かに相交る日、これぞ彼の現世に於ける唯一の聖き、貴き日であり。神前の祝宴であり、神との最終の饗宴であつた。

詩人は歌ふ。

なんぢわが仇のまへに我がために筵をまう
け、わが首にあぶらをそゝぎたまふ、わが酒

杯はあふるゝなり。

と、神との饗宴、仇の亂舞する面前の祝宴、彼の注ぐ尊酒は、彼が酒杯に満ち溢れ、彼のそゝぐ香油は頬に流る、その恩恵の豊かなるに心身の疲勞は癒され、さらに彼をして來る可き使命に奮起せしめた事であらう。イエスはこの饗宴に與らん爲め、彼らを避けて隠れ給ふた。斯して彼は十字架上への準備をせられたのであつた。

アブラハムの信仰 (上)

石川 仲伊

アブラハムが父テラに伴はれてカルデアのウルを立ち出で、メソポタミヤのハランに滞在してゐた時、エホバの言彼に臨んだ「汝の國を出で汝の親族に別れ汝の父の家を離れて我が汝に示さん其地に至れ」(創世記一二・一)と。

これは誠に辛き命令であつた。斯の如き冒險は信仰の人ならずば到底やれるものでない。アブラハムは「エホバの自己に言ひたまひし言に従ひて」親しき親族に別れを告げ、妻と甥と従者と凡ての財産とを携へてハランの地を立ち出でた。

アブラハム時に歳七十五、その行先は何處ぞ。彼は少しも之を知らない。唯エホバ我に出で往けと命じ給ふが故に、彼に絶對に信賴して彼の導き

給ふがまゝに出て往つたのである。

あゝ偉大なる哉アブラハムの信仰、彼の信仰は嬰兒が母に信賴するが如き單純なる信仰であつた。エホバはアブラハムに「我汝を大なる國民と成し汝を祝み汝の名を大ならしめん汝は福祉の基となるべし」(二・二)と約束し給うた。

アブラハムの信仰は約束の信仰であつた、約束なくしてエホバはアブラハムに現れなかつたのである。

エホバ、アブラハムに言ひ給ひけるは汝の目を舉げて汝の居る處より西東北南を瞻望め。

凡そ汝が見る處の地は我之を永く汝の裔に與ふべし。我れ汝の後裔を地の塵沙の如くなさ

ん(創世記一三・一四—一六)

エホバ彼を外に携へ出して言ひ給ひけるは、天を望みて星を數へ得るかを見よ。又彼に言ひ給ひけるは、汝の子孫の是の如くなるべし

(一五・五)

エホバはたとへ如何に守るに辛き命令をアブラハムに降下したる時と雖も、其背後には必ず大なる祝福の約束があつた。ハランの地を出で、より二十四年、アブラハム九十九歳の時に至り、エホバはまた彼に顯はれて言ひ給ふた。

我わが契約を我と汝の間に立て大に汝の子孫を増さん。アブラハム乃ち俯伏たり。神又彼に告げて言たまひけるは、我汝とわが契約を立つ汝は衆多の國民の父となるべし。汝の名を此後アブラムと呼ぶべからず、汝の名をアブラハム(衆多の人の父)とよぶべし、其は我汝を衆多の國民の父と爲せばなり。我汝をして衆多の子孫を得せしめ國々の民を汝より起さん王等汝より出べし。我わが契約を我と汝および汝の後の世々の子孫との間に立て永久の契約となし汝および汝の後の子孫の

神となるべし(一七・二一七)

あゝこれ如何に喜ばしき恩恵の約束なるぞ。信仰の人アブラハムは歡喜に溢れ、將來成就すべき約束を信じて限りなき希望を抱いた事であらう。

然るに信仰の人アブラハムの心に惱ましき事が起つた。それはエホバに對する信頼の動搖であつた。彼にとつて惱ましき問題は子が無い事であつた。たゞ單に子の無い事は何等問題ではない。然しアブラハムにとつては、事はエホバの約束の成否にかゝつた。エホバは彼を「大なる國民に成さん」との約束を以つて呼出し「汝の後裔を地の砂の如くなさん」「汝の子孫は天の星の如くなるべし」と繰返し約束し給うた。然るにすでに十有餘年を経、アブラハム齡九十九歳、妻サラ九十歳に達するも未だ子あるなし。彼の身も死せるが如く、彼女の胎も亦死せる如くであつた。老アブラハム夫妻は遂に唯一の望みなる約束の子無くして

去り、而してダマスコのエリエゼル、彼の家の嗣子たらんとしてゐる。

時にエホバの言彼にのぞんだ、曰く「此者は汝の嗣子となるべからず、汝の身より出づる者なんぢの嗣子となるべし」と。「アブラハム、エホバを信ず。エホバ之を彼の義となし給へり」(一五・六)。

彼はエホバの言に接し常識を以つて嘲ることをしなかつた、又理性を翳して批判することをしなかつた。彼はエホバの言ひたまふ事、爲したまふ事なるが故に疑はず怖れずたゞアーメン(然り)と言ひて絶対無條件に信じたのである。

アブラハムの義とせられしは「不信をもて神の約束を疑はず、信仰により強くなりて神に榮光を歸し、その約したまへる事を成し得たまふ」(ロマ四・二〇二)と確信せるが故である。洵に信仰の秘義は此處にある神の申出に對し無條件に應諾し、凡てを聖手に委ねる事が信仰である。

柏 木 通 信 (第廿一信)

齋 藤 宗 次 郎

日曜日の集會

ア、又此罪を赦し給へ。二つの我に惱む僕を憐み給へとは恩寵に包まれながらも屢々發する我等の哀願である。されど人生の旅人よ慰めよ。其處に安息日は天よりの巻物の如くに信徒の前に展開される。朝の祈に恵みは降り、信仰の翼に力は加へらる。神は内より又外より現はれ給ふ。我只主にのみとの自由は與へられて我の存在は頓に消え失す。聽てキリストに在る兄弟を思ふの愛は内外遠近に及ぶ。讚美も感話も祈禱も献金も報告も悉く潔められて、信頼感謝の中心目標は只獨子の十字架に聚る。其無限の生命によつて支配せらる。然り十字架の中に靈肉自他一切は包容せらる。我等は此天國への宿驛の憩ひを經て終に彼處に達するのである。

一、山上の垂訓と十字架 齋藤

所謂山上の垂訓はイエスの臨機應變の教訓説話ではない、ヨハネが先驅者の務めを果し了るや、イエスは新たに起つて新約の精神を明かにし舊約への別れを神と宇宙と人類とに告ぐる組織的大宣言である。律法と預言の

成就を告ぐる喜びと、贖罪の十字架を預言する苦みとの交錯の中から發せられし天國の福音である。其凡てが十字架に密接の關係を有すれど、未だ之を判然と言ひ表はし得るの時に到達して居ない。さりながら福音の中心眞理たる十字架は必ず示さざるを得ない。後に使徒パウロが其使命價值精神を釋明するまでは、一人も其れを言明する資格を有する者は無い。そして之を聞くも學者らの如くならず云々といひて單に驚き合ふ様な幼稚なる群衆の前に、此深遠壯大なる教を説かねばならぬ。預言の苦痛は實に此點に在るのである。そこでイエスは先づ劈頭に心の貧しき者といつて十字架の前に立つてのみ懐き得る人々の靈魂の態度に意味を含め、それより律法と預言の成就、神の國と其義、磐の上に家を建てたる人に成就、義、磐の語を以て主の十字架が福音の唯一根本の源泉なるを豫表し、以て、主が異邦巡回の途上より受難期に至るまでに、密かに其弟子等に向つて、己が十字架の死を豫告せしこと四回に及びしこと、關係連絡を保たしめ、終に自ら十字架の預言を事實カルバリーに於て成就し給ふたのである。神の義はこれに現はれ、救拯の磐は此處に据ゑられたのである。去れば我等は千九百年前に遡り

て此教訓をガリラヤ湖畔に近き丘上に於て聞くことを罷め、イエス既に死に、パウロ之を闡明し、無數の信徒之を體驗せし後の今日、其十字架の生命を豊かに灌ぎ給ふキリストイエスより親しく之を學ぶ時に、此山上の垂訓全部が悉く天國の福音、信仰の所産として、信者誰人にも主に於て完全に實現さるゝこと、なるのである。そして是れ理想的基督教道徳又は實行至難の教訓なりなどの懼るべき誤解蹉跌は一掃し去るに至るのである。(大要)

一、七十人の派遣に際して 山栴

一、ホレブに於けるエリヤ 大嶋

一、汝尙ほ一つを缺く 大賀

江原主筆と語る 七月十日午後一時主筆訪問の田村兄と東京驛に邂逅し、共に横須賀行の電車に乗つて鎌倉に向つた。余は柏木通信の拙稿を届けん爲であつた。二時着、主筆先生の容態如くに依つては玄關にて辭去せんと決せしに、切なる歓迎の言とキリストに在る全き平安満足の状態に動かされて、遂に又應接間のソファアに納つた。今や我日本國には驚くべく感謝すべき光明希望の事實は極めて多く余の眼に映するものであるが、大能の神は病弱の此人を捕へて景清の牢窟の附近に住はせ、多年

聖書の眞理を弘く天下に傳へしむるは其内の一つである。氏の閑居を訪ふ毎に余は莊嚴の氣に撲たる、も感ずるものである。此日氏の余に語ることは多くあつた。自己の尊き經驗、内村先生との公私の關係、知友の美點、基督者の責任、全集に對する要望等綿々盡くるを知らなかつた。余は氏の健康を氣遣ひ屢々注意の言を挟みながら之を傾聽して倦まなかつた。樂しきかな基督者の會合、窓外の棕櫚夕風に搖ぎ、林間の小鳥啼を尋ぬる頃、滿面に笑みを湛えて全家族と共に廊下に立つて余を見送られし江原主筆と別れ去つた。

片瀨の涼風 七月盡日午後、余は妻と共に自園の蕃茄を携へ、片瀨西濱の松林中に内村靜子夫人を訪ふた。江の島驛前の雜沓に反し、寔に閑寂なる靜居であつた。玄關に立つて往訪を告ぐる小聲を送れば、之に應ずる夫人の聲は階上に響いた。ア、善かつたあの力ある奥様の御聲!と、妻は余を顧みて慰安の想ひを漏した。導かる、ま、に階段を上つて涼風の裡に對座した。夫人の顯著なる加餐の効を祝して後、余は留守宅の用務、全集刊行の進行、狀態等を報じた。程なく冷果は鉢に切られた。閑談は續いた。友人の消息、札幌成宗各家庭の安否、夏の

樂み、秋の希望等涼風の如き快き話柄を交換すること二時間に及んだ。余は深く主による款待を謝し、且つ三十餘年間粉骨碎身隠れたる處に夫君の偉業を内助せられし此人の上に恵み盡きざれと心に祈つて歸路に就いた。

牛久湖畔の半日 現代日本に於ける隨一の田園畫家小川芋鏡氏は常陸稻敷郡なる牛久沼の東岸古城址に居住し、四時^{ヒト}士魂を湖面の清風に洗ひ、芋と麥と大豆の畑の中に、祖國の爲の熱涙を筆に注ぎつ、周圍のあらゆる田園現象と農民の生活とを畫題として餘韻滴る繪畫を世に示すこと三十餘年に及んで居る。曾て余が青年の頃、何とはなしに其風格氣品に心を惹かれて、遙か北上河畔から突然揮毫を乞ふて見た。氏は聊かも相識るなき余に對し靈筆を揮つて「嬰兒基督」を描き、人類は此平民種たるキリストによつて人生の眞趣を味ふべきなりと賛して贈つて呉れた。余の當時の喜びと感謝の様は、昨日の事の如くに眼前に髣髴する。爾來氏に對して益々敬愛の念を加へ來つた。そして間もなく不折畫伯より恵まれし「殉教者セバステン」なる巴里美術校卒業製作の油畫と共に、余が信仰の苦闘に際し、幾度慰藉獎勵を與へて、キリストの御許に余を追ひやつて呉れたか知れない。此

夏全集「日記上」の校正を了るや否や腦と眼の休養を兼ね、牛久沼名産の肥大なる鰻が蓴菜の葉影を游泳する頃同氏を訪ふて半日の清談を試みた。謹直の態度、憂國の氣魄、謙讓の言辭に接して余は充分に胸襟を披きて色々の事を語り合つた。私の眼には日本の基督教は一種異様に映するものがある、内村先生の基督教は基督教といふ様に私の心に感じて來たものであります。所が今貴下の言によつて其根本真相を伺ふことが出來、先生はそんな偉大な使命に生涯されましたか、それでは日本の將來には希望が満されてありますと氏は力強く余に語つた。尙氏は海濤の打ち返す犬吠岬の巖頭に座して、冥目沈思、此壯偉の天然力を驅使する靈妙の胸に全心を通じたる森嚴の實驗を述べて畫家畫布に對する眞毅なる心境を披瀝するを愉快に聞いた。再會を約して別れ、門に倚りて願れば、松林の間から夕陽に輝く靜かなる湖面は、平和の憩ひを農村に送り出す氣色^{げいしき}を示して居つた。

石河光哉氏歸國 昨年秋季鬱勃たる希望を懐き佛國に向つて出發せし同氏は、途上聖地に逗留すること三個月の後巴里に入つて、繪畫の努力信仰の苦戦に尊き月日を送り、時満ちて七月末無事歸國された。

農村振興と信仰

——持地名い子女史著「デンマーク見聞記」に因みて——

鈴 木 敏 元

今や我國の農村問題は大きな政治問題、社會問題となり、其結果は正に國家の消長に關はるものがあらうとしてゐる。夫れ故に政府當局者は今全力を擧げて此問題の爲めに奔命しつゝある。

即ち其第一策は所謂インフレーション政策による通貨流通の潤澤を計り、第二には地方的大土木事業を興して其地方農民に金錢的收入を計らしめんとする法策と、第三には蠶糸買上げによる糸價の釣り上げによつて養蠶家を救済せんとすることなどが擧げられて居るのであるが、其根本問題たる人の魂の問題を考慮するものとしては無い様である。

茲に於てか我等は知る、此等の對策も結局は其効果を收むることが甚だ困難であらう事を。何となれば萬物の復興は、抑も人の靈魂が救はれる事に於いて初めて實現

さるべきことは聖書の明かに示す所であるからである。即ちロマ書八章一九節以下に於て「それ造られたるものは、切に慕ひて、神の子だちの現はれんことを待つ、造られたるもの、虚無に服せられしは己が願によるにあらず、服せしめ給ひし者によるなり、然れども尙造られたる者にも滅亡の僕たる狀より解かれて神の子たちの光榮の自由に入る望は存れり、我等は知る、すべて造られたるもの、今に至るまで共に嘆き共に苦しむことを」と。此聖句に接して我等は我等人類自身の爲めに嘆くと共に他の萬物に對して深き同情を表し、只管大能者の前に俯伏すの外は無いのである。

之に就いて思ひ起すことは、我が農聖二宮尊徳翁が大陸國櫻町陣屋に於いて、小田原藩の大久保侯から依囑された領地開發の事業に、彼の精根と深き經驗と智慧とを傾けて畢生の仕事としたにも不拘、數年を出づるも尙其業績擧らず、焦躁に堪へられなかつたのであるが、其原因は結局農民の精神に眞の生命の宿るものが無いことに外ならぬことを發見し、仕事は先づ第一に人の魂の改造

より始めなければならぬと氣付き、其結果翁は下總の成田山に二十一日間の断食祈願をこめられてより、漸次農民の自覺を促すことが出来、自然事業も完成することが出来たと云ふことである。

依而知る、我等は我農民に高貴なる理想を供し、基督教的精神を布殖し、農村が其信仰によつて立ち上る時に、茲に始めて天然と人との調和を見ることが出来、潑刺たる農村復興の姿を見、次に商工復興、然り國全體の復興繁榮を見ることが出来るに至るのであらうと悟する、之凡ての困難なる問題は、人が神に對する叛逆の罪より來るからである。

之のことを事實を以て教ふるのが、彼の北歐の一樁士、我が四國大に過ぎぬデンマーク國である今や農業國として世界に冠たる繁榮を致しつゝ、ある其原因が、偏に一工兵士官ダルガスの信仰によつて荒蕪たる不毛の地が綠地綠林に化され、グルンドウキヒ僧正の信仰が國民に眞の自覺と獎勵と愛國心とを與へしことによるのである。

我が持地女史は故夫君と共に永く臺灣朝鮮に各十年宛

所謂殖民地産業開發の爲め其職に力を致されたのであつたが、夫君の永眠後、か弱き一婦人の身を以て單身獨逸及デンマークに赴かれ、戦後の獨逸農民の窮狀を具さに見聞し、更にデンマークに於ては國民高等學校に起限される所あつて、同國に於ける産業と信仰との關係を學ばれた。今度之を一著書として世に送られ、之を恩師内村鑑三先生に捧げられたのである。

惟ふに、國を教ふ所の根本は一見迂遠なるが如く見えて、實は最捷徑なる基督教の傳道による人の魂の救に若くものはない(内村師の言)。其意味に於いて此書が今世に送られた事は重要な意義ありと云はねばならない。願はくば、主の恩恵早く我が農村に臨み、國と民とが眞に救はるゝの日は一日も早く來らんことを祈るのである。

身邊漫筆

○暑い時は讀書も執筆も億劫だ。家中で一番涼しい支關にツック張りの椅子を持ち出し、無爲に過ごす事にきめた。小栗襄三君が八月中来て居るので、よい話相手が出来た。

○百年程前に米國に法律家で醫者でそして新聞記者をしたホームズといふ皮肉屋があつた。彼は「朝食卓の専制君主」といふ本でこんな事を云つて居る。お恥しいが今はもう退會して仕舞つたが、一度は私も相互賞讀協會の會員であつた。それはある先生を賞讀し、又或る程度に弟子たち相互を賞め合ふ若い科學者たちの——彼は基督者たちのとは云はなかつた——一團であつた。實際その中の多くものは賞讀に價した。その中から後に有名になつたものも少なくない。

○彼は云ふ。天才は皆此の賞讀協會の會員たる資格がある。何故なれば自分が眞に天才であり、何者か他に優れてゐる能力を有つ者は他の長所を認め、之を賞讀するに吝かではないから。だから賞讀會は組織され、永續する可能性がある。一番困るのは中途半端の天才である。凡人はよい。天才は素晴らしい。だ

が、凡人でありながら、どこか少し天才が加つたもの位鼻もちのならないものはない。葡萄酒も水もよいが、水を入れたコップのふちに葡萄酒が少しくつゝいて居るのと同様、甚だ仕末が悪い。彼等は互に自分の優秀を鼻にかけ、他を下目に見て互に冷罵し合ふのだ。此の半端天才は會員になる資格はない。

○私は我が國に相互賞讀協會が嘗て一つあつた事を知つてゐる。それは文士が互にその作品を賞め合ひ、その聲價を高める目的で設立されたのであつた。現今マルクス主義者もそうである。凡人は協會加入の資格がある。

○然るにこの協會に加入の資格の無い中途半端の天才は互に「公的提携を中止」し合ひ、各自「獨立」を標榜して、自分獨りで満足し乍ら何かの仕事をやつてゐるのである。

○私は此の程出版の *Pe-Yan* 教授の著 *China's Future* を讀んで、基督教がその起りから今に至るまでに直面した種々の大問題を僅か二百餘頁に纏め上げた手腕に敬服した。反基督教と基督教各派夫々に對する彼の批評は甚だ學者らしく公平である。私は英語の讀める人々に此の書を紹介する。自分の意見が基督教全思想中どの位置にあるかわからう。

○此の書の最後の頁で彼はこう云ふ皮肉を云つてゐる。「若し自分の考が一番正しい事な確信しやうとし、又は之を他に納得させやうとするならば、自分より以下の反對論者をつゝくに限る。度々相手をへこませると、自分の考程正しいものは無いと自信がついて来る」と。若し無教會主義の一派が我が説は一千九百年の今始めて發見された大眞理である事の自信を得、又他人に納得させるには下らない牧師の言行を一々捉へて攻撃するに限る。氣のきいたお怪が引込む今時分ロマ法王をかつて思想統制をやらうとする者なども差當りよい相手であらう。

○昨秋私は自分の死の近きを覺悟して、エレミヤを書いた。彼が亡國を眼前にして悲願の彼方に大なる希望を發見したその心持ちに幾分觸れることが出来た。稿全く成つた今日私はまだ働き得ることが大なる感謝である。此の秋はロマ書に没頭する積りである。私の生の根據が此の書に在ることは少しく私の文を讀まれた方々には明かであらう。自惚の根絶、只神を誇ること、此の書は我等に之を教へる。

本誌愛讀者諸君に謹告

本誌は他の世間雜誌や其の弊に倣ふ宗教雜誌と異なり、大々的に新聞廣告をし、市中の店頭に曝して讀者を呼ぶべきでありませぬ。店頭に悲痛に憫む者、義に飢えたる靈魂、眞面目なる少数の人々を訪ね、その慰安となり、欲求を満し、善き伴侶たらんとします。

夫れ故、本誌は現在市内有名書店に毎月出して居ますが、之を擴大する考はありませぬ。今後専ら内容に力を注ぎ、世間の賣らん哉雜誌と全然異なり、一意専心、福音を述べ、新生命を供し、日下刻々大變動を來しつゝある此の時、救國の實を達成し度くあります。

若し夫れ本誌の發展については、只本誌に賛同せらる愛讀者諸君の救國の熱誠に俟つ外ありません。諸雜誌非況の今日、本社直送月極讀者の数は毫も減じません。以て愛讀者の如何に多きかを知り、主筆の感激するところであります。どうぞ、眞面目なる人、憫める人、新生命を求めつゝある人々に本誌を御紹介下さい。そのため本誌書號を御入用の場合は幾部にても本社に御申越下さい。

藥學士 平山 清著

信仰と健康への道

定價 五十錢
送料 四錢

嘗て本誌に寄稿された著者の文は多く人の注意するところとなつた。それによつて知られたやうに本書は結核病の療養上信仰の必要を力説したものである。我が國には此の病の爲めに憫むものが甚だ多い。恐らくは癩病に次いで悲惨なる實例を多く見る。然し乍ら他面、此の病程心を神に向けしめるものはない。そして人若し神を知るに至らば、何の幸福か之に過ぎやう。假令病癒えずとも感謝を以て一生を送り、又他に大なる感化を與へ得る。然かも神を知つて病は大てい癒へるのである。著者はこの事を親切に説く。一讀をすゝめる。

(獨立堂版)

江原萬里著

聖書の現代經濟觀

定價 一圓二十錢
送料 八錢

(聖書の眞理社にて取扱ふ)

主筆の講義

當分第三日曜日だけにし、第一水曜日の講義は中止す。

聖書の眞理定價(送料共)

一 部 二十錢
 半年(六部) 一圓十錢
 一年(十二部) 二圓十錢
 一年半(十八部) 三圓四錢
 海外一年 二圓六十錢
 拂込は聖書の眞理社(振替東京六三三七五番)へ。獨立堂にてもよし。

思想と生活合本

送料不要
 二三年度 第一卷 二、〇〇
 四年度 第二卷 一、八〇
 五年度 第三卷 二、三〇
 六年度 二、五〇

聖書の眞理合本

送料不要
 全四部注文の場合に六圓に割引す

編輯印刷 江原萬里
 兼發行人 江原萬里

發行所 神奈川縣鎌倉町扇ヶ谷三三四
 東京市外澁谷町向山九七
 東京市神田區表猿樂町一九
 印刷所 聖書の眞理社
 共榮堂印刷所
 東京市外澁橋町柏木九四六
 發賣所 獨立堂書房
 振替東京九四六番

(昭和三年三月十六日)
 (第三號郵便物認可)

聖書之眞理 第五十九號

昭和七年八月二十六日印刷
 昭和七年九月一日發行 (毎月一日一回發行)

本誌定價二十錢